

前橋城

都市計画道路前橋公園通線
道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2004

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

はじめに

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間に南北に利根川が流れる水と緑にあふれた地です。

前橋には、かつて徳川家康より「関東の華」と言わされたという前橋（古くは駿橋）城がありました。その築城は古く、15世紀末の長野氏によるとされています。この城は江戸を守る北関東の押さえとして、宇都宮、川越、忍と並び、関東四名城の一つに数えられたと言われます。

その後、城主の移城に伴い、一時取り壊されましたが、慶応3年（1867）には、町人等の協力も得て、前橋城を再築して城主松平直克を迎えることができました。しかし、時代が大きく転換し、翌年には明治維新となり、明治4年（1871）に廃藩置県が行われ、城の本丸は県庁として使われるようになりました。

今回調査を実施した本遺跡では、県庁の新改築等に伴い掘削した跡が多く存在しましたが、酒井氏時代末期の前橋城や再築前橋城の堀跡と想定される遺構、当時の生活を偲ばせる瓦や陶磁器などが検出されました。

最後に、本発掘調査実施にあたりご理解とご協力を賜りました県・市関係部局、地元関係者の方に感謝申し上げます。本報告書が本市の歴史研究の一助となれば幸いです。

平成17年3月31日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 中原 恵治

目次

遺跡の位置と環境	1
調査に至る経緯	3
調査の概要	4
遺跡の地層	6
拓本と遺物観察表	8
まとめ	9
遺物写真	10

例　　言

- 1 この報告書は都市計画道路前橋公園通線道路改良事業に伴う発掘調査に関するものである。
- 2 調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した。
- 3 発掘調査の要項は以下の通りである。
調査場所 前橋市大手町一丁目152-2ほか
発掘担当者 高橋亨・小嶋尚



酒井氏時代の瓦



松平氏～県庁時代の瓦



北区出土の陶磁器



南区出土の陶磁器

遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

前橋市の市街地は、関東平野に望む前橋台地に立地している。本遺跡は、利根川左岸に位置し、周辺には遺跡も多く見られる。しかし、市街地は江戸時代の城下町から明治期以降現在に至るまで、県庁として利用されてきたため、遺跡の分布が明らかにされていない。



周辺の遺跡一覧

1	前橋城（本遺跡）	7	村東遺跡	13	遠見山古墳
2	前橋城遺跡	8	蛇穴山古墳	14	堰越遺跡
3	王山古墳	9	宝塔山古墳	15	堰越II遺跡
4	昌楽寺廻向遺跡II遺跡	10	愛宕山古墳	16	大友屋敷II・III遺跡
5	山王庵寺跡	11	総社二子山古墳	17	元総社明神遺跡I~XII
6	大屋敷遺跡I~V	12	稻荷山古墳	18	寺田遺跡

2 歴史的環境

本遺跡は、前橋台地の北端部に位置する。前橋台地の地表面は、縄文時代早期頃に堆積した総社砂層に厚く覆われ、それ以前の遺跡地はあまり知られていない。県の前橋城遺跡発掘調査では、縄文時代中期後半の河道が検出されている。

古墳時代になると、旧利根川沿いには、県内でも有数の古墳群が造られるようになる。特に、古墳時代末期から飛鳥時代にかけて造営された総社古墳群の築造技術は高く、これらの古墳の主は大和政権と密接に結びついた上毛野地方の中心豪族と考

えられる。また、東日本最古の寺院である山王庵寺もこのころ創建され、優美な塔心礎・塑像群などに技術の高さがうかがえる。

古代になると、前代の繁栄を引き継いで元総社の地に国府が置かれ、その北西に国分僧寺・尼寺が建造された。また、国府の南を管道である東山道が通過し、様々な物資や人の往来が盛んで、國の中枢地へとなっていく。国府周辺の発掘調査では、古代の集落が多数発見されており、広範囲に集落が形成されていたと考えられる。

天仁元年（1108）、浅間山が大噴火をおこし、上野国一帯に大量の火山灰が降りそそいだ。時の国司は、この災害により国内の田畠が壊滅したことを都に上申している。この事実は前橋周辺の発掘調査でも確認されている。この災害は、上野国内に大きな変革をもたらした。関白藤原忠実が画策した上野国五千町歩計画をはじめ、上野各地に次々と荘園が成立し、そのもとで武士が勢力を拡大していったのである。

やがて、室町時代になると、上野国の守護に上杉憲房が任命され、その子憲顕は関東管領に任命された。上杉氏から上野国守護代に任命された長尾氏は、國の中心であった国府の地に蒼海城を築き、これを本拠地とした。



前橋城車橋門石積

各地の武士団は山麓部に多く山城を築き、平野部では屋敷に堀を巡らせて城館とし、抗争に備えた。本遺跡周辺にも、数多くの城館が存在していた。

15世紀中頃になると、守護代長尾氏の勢力は衰えはじめる。そうした中で台頭してきたのが、箕輪城の長野氏である。長野氏は東上野進出の拠点として、利根川に面した、石倉の地に城を築くが、利根川の変流によって壊滅してしまう。変流した利根川の東側に残った郭をもとに築かれたのが、姫橋城とされている。この頃、全国各地は戦乱の時代にあり、東國の要である上野国もその渦中にあった。内乱等で勢力を弱めた関東管領上杉氏は、長尾氏に管領職を譲り、上野国内の團結を図る。上杉謙信は、姫橋城を本拠地として度々越山し、北条氏、武田氏と対峙し抗争を繰り広げ、戦乱の時代の中で重要な基点としての役割を担った。

やがて、天下統一を果たした徳川家康は、江戸城を本拠地として幕府を置き、各地の大名に領土を安堵して幕藩体制を確立した。東國の要である上野国には諸代大名を中心に配置し、江戸の北の守りを固めた。姫橋城には、諸代筆頭の酒井重忠が入城し、この地を治めた。17世紀後半から利根川の洪水による城の崩壊が進んだことも原因して、寛延二年（1749）九代酒井忠恭は姫路へ転封となり、代わって姫路城主松平朝矩が入城した。

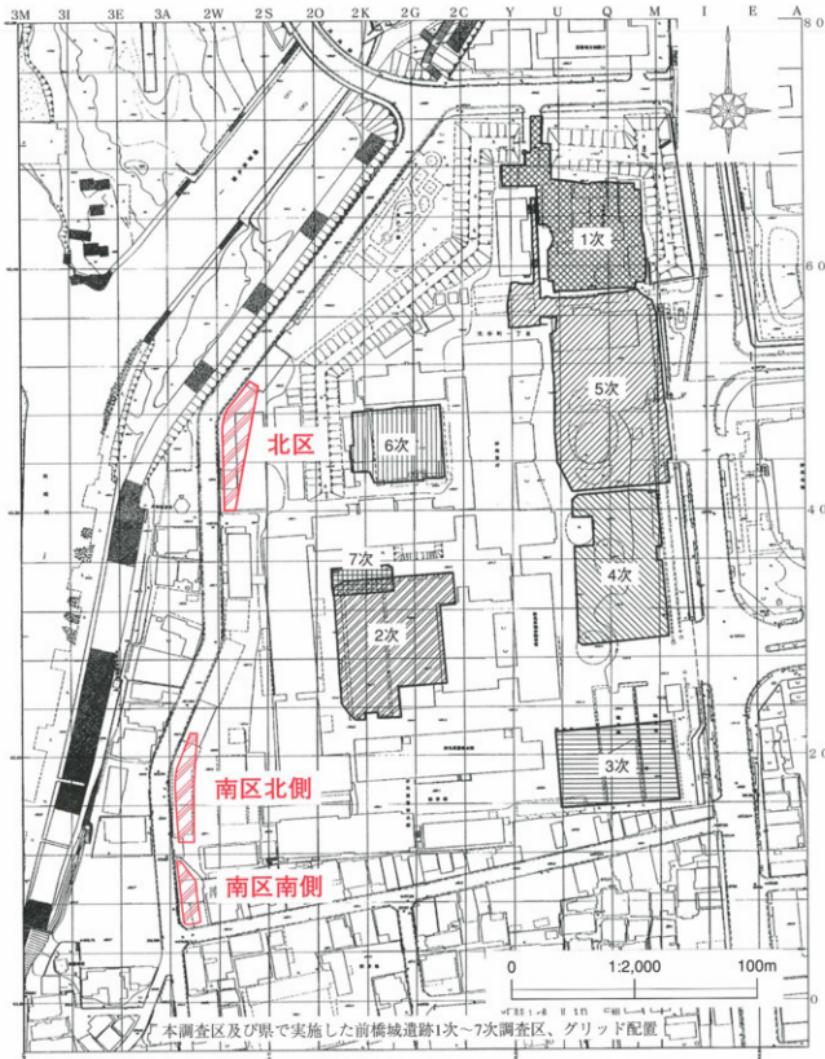
その後も城の川欠けは続き、明和四年（1767）には、ついに前橋城を放棄し、川越へ移っていった。城主が不在になると前橋城は壊され、その後約100年間、陣屋が置かれた。幕末になると、安政六年（1859）の横浜開港にともなう生糸貿易により、前橋は活況を取り戻した。そして、慶応三年（1867）には、領民の協力を得て、前橋城を再築して城主松平直克を迎えることができた。ところが、翌年には明治維新、明治四年（1871）に廢藩置県が行われ、城郭の機能を果たさないまま、群馬県庁として使われた本丸御殿を残して取り壊されてしまった。



前橋城車橋門跡

調査に至る経緯

平成16年10月6日付で都市計画道路前橋公園通線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査依頼が、依頼者の前橋市長 高木 政夫 より前橋市教育委員会に提出された。本市教育委員会ではこれを受け、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受諾、11月10日より調査を開始した。グリッドの設定は、群馬県教育委員会が平成4年から8年にかけて実施した前橋城遺跡1次～7次調査区に合わせ、5m方眼を採用し、国家座標第IX系X = +43100m・Y = -68875mを基点に、北に向かって1、2、3と数字をふり、西に向かってA、B、C（Zの次は2A、2Zの次は3A）とアルファベットをふり、標記した。グリッドの基点は南東角である。



調査の概要

平成16年11月10日より調査区域の北区から調査を開始した。ここは、これまで県昭和庁舎の一部や駐車場として使用されていた。6月に実施した試掘調査から改修工事等に伴う攪乱箇所が多いことが判明した。本調査では、調査区中央に南北のトレーンチを入れ、試掘調査で得られた結果とを照合しながら遺構の確認を行った。

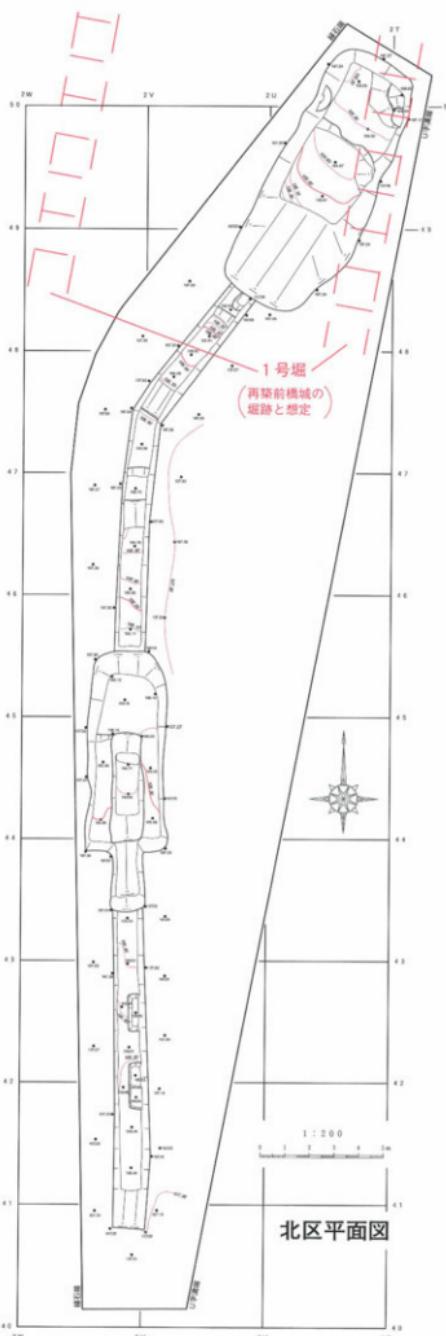
その結果、北側東壁沿いに南北方向に走る堀跡（1号堀）の立ち上がりを確認することができた。その位置から、再築前橋城本丸の西側を南北に走る堀跡と想定されるだろう。堀の規模は再築前橋城絵図からは、上幅15m程と考えられるが、西側の立ち上がりは、道路として使用されているため確認できなかった。また、この1号堀の周辺は調査区域が狭く、排水管が埋設されていたため、深く掘り下げることができなかつた。よって、堀跡の想定線が東西方向にずれる可能性があると考えられる。

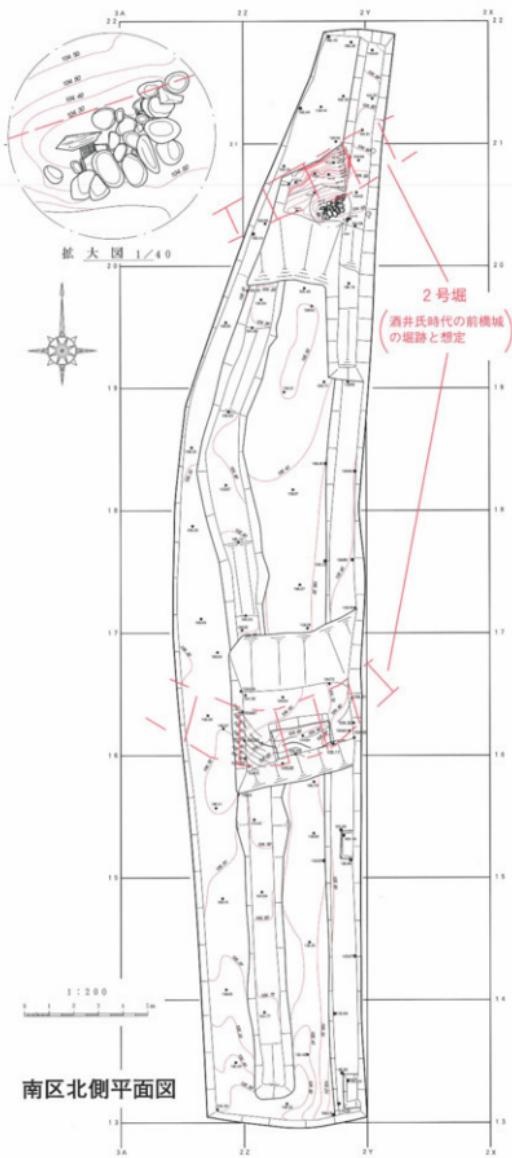


北区全景 南から



1号堀出土状況





南区北側平面図

南区は11月19日の行幸の後、11月22日より調査を開始した。北区同様に擾乱が多くあったが、調査区の北側と中央付近に、それぞれ東西方向に走る堀跡（2号堀）の立ち上がりを確認することができた。その位置から、酒井氏時代末期（18世紀後半）の前橋城二の丸の堀跡と想定されるだろう。堀の規模は、酒井氏時代末期の前橋城絵図から、上幅20m程度であるが、2号堀とほぼ一致すると考えられる。なお、2号堀北側の底面に集石が検出されたが、その出土状況から後世になって積み重なったものと考えられる。また、焼土跡を2号堀南側の立ち上がり付近で確認することができた。遺物に関しては、酒井氏時代から明治期に至る瓦や陶器類を検出できた。



再築前橋城の瓦出土状況



焼土と瓦の出土状況(2号堀南側付近)



南区北側全景

遺跡の地層

利根川左岸前橋台地上に位置する前橋城の発掘調査では、土層の良好な断面が認められ、層位や年代が不明な複数のテフラ(tephra, 火山碎屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。そこで、前橋城発掘調査区においても地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行い指標テフラとの同定を行うことになった。調査分析の対象地点は、北区1号堀、南区2号堀の2地点である。

1. 北区1号堀(図1)

北区1号堀のテフラでは、下位より灰色砂層(層厚5cm以上)、黄色軽石混じり灰色砂層(層厚6cm、軽石の最大径18mm)、桃灰色シルト層(層厚5cm)、白色細粒軽石に富む桃色砂層(層厚8cm、軽石の最大径4mm)、白色細粒軽石混じり桃色砂質シルト層(層厚13cm、軽石の最大径4mm)、白色軽石を少量含む桃色砂質シルト層(層厚9cm、軽石の最大径6mm)、白色軽石に富む灰色シルト質砂層(層厚8cm、軽石の最大径12mm)、炭化物混じり暗灰色砂質土(層厚13cm)、白色軽石を少量含む灰色砂質シルト層(層厚8cm、軽石の最大径4mm)、緑灰色粘土層(層厚3cm)、成層したテフラ層(層厚43.2cm)、灰色砂層(層厚4cm)、成層した桃色砂質細粒火山灰層(層厚3cm)、凝灰質白色シルト質砂層(層厚4cm)、層理が発達した灰色砂層(層厚4cm)が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より黄色軽石層(層厚15cm、軽石の最大径12mm、石質岩片の最大径3mm)、黄色細粒軽石層(層厚8cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径2mm)、成層した桃色砂質細粒火山灰層(層厚4cm)、黄桃色細粒火山灰層(層厚3cm)、黄桃色細粒火山灰層のブロックを含む成層した灰色砂質細粒火山灰層(層厚5cm)、成層した桃色粗粒火山灰層(層厚8cm)、黄色細粒火山灰層(層厚0.2cm)からなる。このテフラ層は、その層相から約1.3~1.4万年前^{*}に浅間火山から噴出した浅間板鼻黃色軽石(Ar-YP, 新井, 1971, 町田・新井, 1992)に同定される。

2. 南区2号堀

南区2号堀テフラでは、下位より灰色シルト質砂層(層厚1cm以上)、灰白色シルト層(層厚3cm)、灰白色軽石層(層厚7cm、軽石の最大径6mm、石質岩片の最大径2mm)、灰白色軽石混じり灰色砂層(層厚15cm、軽石の最大径5mm)、白色軽石混じり暗灰色泥層(層厚11cm、軽石の最大径6mm)、灰白色シルト層(層厚4cm)、成層したテフラ層(層厚37.8cm)、黄白色凝灰質シルト層のブロックを含む黄灰色砂質シルト層(層厚2cm)、桃色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)、層

理が発達した灰色砂層(層厚13cm)、層理が発達し若干黄色を帯びた灰色砂層(層厚23cm)、層理が発達した灰色砂層(層厚3cm)、若干黄色を帯びた灰色砂層(層厚4cm)、桃灰色砂層(層厚3cm)、若干黄色を帯びた灰色砂層(層厚17cm)、黄褐色砂層(層厚15cm)、礫混じり黄褐色砂層(層厚9cm、礫の最大径5mm)、黄褐色砂層(層厚13cm)、盛土(層厚16cm以上)、盛土(層厚19cm)、表土(層厚13cm)が認められる。(図2)

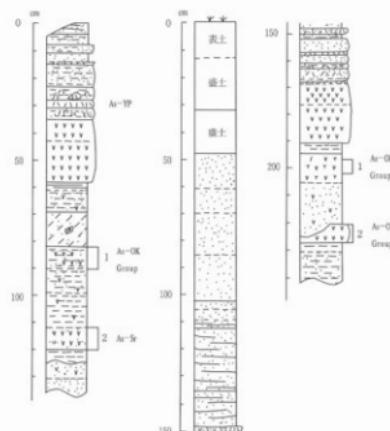


図1

数字はテフラ分析の資料番号

図2

3. テフラ検出分析・屈折率測定

(1) 分析・測定試料と分析・測定方法

テフラ粒子の量や特徴を把握するために、上述2地点において採取された合計4点の試料を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は、次の通りである。

1) 試料8 gを秤量。

2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。

3) 80°Cで恒温乾燥。

4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を把握。

さらにテフラ検出分析済みの試料のうち、特徴的な2試料を選択し、含まれる軽石を粉碎して火山ガラスの屈折率測定を行った。測定は、RIMSを用いた温度変化型屈折率測定法による。

(2) 分析・測定結果

北区1号掘の試料2には、最大径3.7mmの白色軽石が比較的多く含まれている。また、白色の軽石型ガラスが多く認められる。火山ガラスの屈折率(n)は、1.506-1.509である。試料1には、最大径9.1mmの白色軽石が多く含まれている。また、白色の軽石型ガラスが比較的多くの認められる。火山ガラスの屈折率(n)は、1.502-1.503である。

南区2号掘の試料2には、最大径6.2mmの白色軽石が比較的多く含まれている。また、白色の軽石型ガラスも比較的多く認められる。火山ガラスの屈折率(n)は、1.501-1.504である。試料1には、最大径3.1mmの白色軽石が比較的多く含まれている。また、白色の軽石型ガラスが比較的多く認められる。

4. 考察

北区1号掘の試料2に含まれるテフラ粒子は、軽石の特徴や火山ガラスの屈折率などから、約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間白系軽石(As-Sr, 町田ほか, 1984)に由来すると考えられる。また試料1に含まれるテフラ粒子は、軽石の特徴や火山ガラスの屈折率などから、約1.7万年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1, 中沢ほか, 1984, 町田・新井, 1992, 早田, 1996)や、約1.6万年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第2軽石(As-Ok1, 中沢ほか, 1985, 町田・新井, 1992, 早田, 1996)など、浅間大窪沢軽石群(As-Ok Group)に由来すると考えられる。

南区2号掘の試料2に含まれる軽石については、特徴や火山ガラスの屈折率などから、浅間大窪沢軽石群(As-Ok Group)に由来すると考えられる。したがってそれが採取された軽石層は、As-Ok Groupのいずれかに同定されよう。また試料1に含まれる軽石については、軽石の岩相や層位などから、やはりAs-Ok Groupに由来すると考えられる。

なお、とくに南区2号掘では、試料2が採取されたテフラ層の上面に乱れが認められた。この乱れについては、インボリューションや震動に伴う変形の可能性がある。またAs-YPの上位に砂層を挟んで認められる成層した桃灰色砂質細粒火山灰層

についても、層相からAs-YPの一部と考えられる。一連の噴火の間に、比較的大規模な降雨や、ごくわずかな休止期があったのかも知れない。

5.まとめ

前橋城発掘調査区において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約2.0-2.4万年前¹⁾)、浅間白系軽石(As-Sr)、浅間大窪沢軽石群(As-Ok Group, 約1.6-1.7万年前¹⁾)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3-1.4万年前¹⁾)などに由来するテフラや、テフラ層を検出することができた。

*1 放射性炭素(¹⁴C)年代

表1 テフラ検出分析・屈折率測定結果

地点	試料	粗石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	色調	屈折率(n)
北区1号掘	1	---	白	9.1	---	pm	白 1.502-1.503
	2	---	白	3.7	---	pm	白 1.506-1.509
南区2号掘	1	---	白	3.1	---	pm	白
	2	---	白	6.2	---	pm	白 1.501-1.504

---:多い、--:多い、::半程度、:少ない、-:認められない、最大径の単位は、mm
pm:粗石型、pm:屈折率測定は、粗石を砕いたものを対象とした。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79

町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276 p.

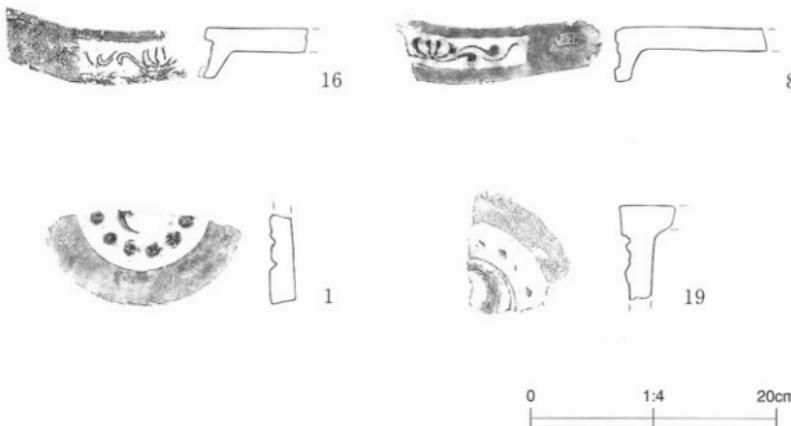
町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学研究に關係する テフラのカクログー、古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-92 8.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山、黒斑～前掛期のテフラ層序。第四紀学会講演要旨集,

no.14, p.69-70.

早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴～とくに御岳第1テフラより上位のテフラ についてー、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

拓本と遺物観察表



遺物観察表

番号	出土位置	器種	法量	陶磁器(口×高×底 瓦(幅×長×厚)	残存	備考
1	北区表採	軒丸瓦	(144) ×	— × 22	1 / 2	松平氏～県庁時代
2	北区表採	磁器	(138) ×	81 × 59	3 / 4	楕 明治以降
3	北区表採	磁器	(211) ×	29 × 96	9 / 10	皿 銅版印刷
4	北区表採	瀬戸・美濃陶器	—	—	口～体片	壺、肩に耳がつく 江戸時代
5	北区表採	瀬戸・美濃陶器？	—	—	破片	碗 型紙印刷 江戸時代
6	北区表採	磁器	30 ×	18 × 15	完形	江戸時代
7	南区北表採	益子(笠間)陶器	(160) ×	85 × (106)	3 / 10	片口楕 江戸末～明治時代
8	南区北表採	軒平瓦	(91) × (131)	× 18	2 / 5	松平氏～県庁時代
9	南区北1トレ	丸瓦	(154) ×	140 × 23	2 / 5	松平氏～県庁時代
10	南区北2トレ	軒平瓦	(122) × (190)	× 18	2 / 5	松平氏～県庁時代
11	南区北2号堀	陶器	(83) ×	85 × 75	2 / 5	楕 明治以降
12	南区北2号堀	瀬戸・美濃磁器	(102) ×	57 × 36	一部欠損	楕 ゴム版印刷
13	南区北2号堀	肥前磁器	(52) ×	136 × (47)	一部欠損	
14	南区北2号堀	瀬戸・美濃磁器？	(144) ×	48 × (65)	1 / 2	鉢 型紙印刷
15	南区北2号堀	瀬戸・美濃磁器	(148) ×	38 × 82	3 / 4	皿 銅版印刷
16	南区南D-1	軒平瓦	(95) × (136)	× 21	1 / 2	酒井氏時代
17	南区南D-1	丸瓦	(232) ×	134 × 19	4 / 5	酒井氏時代
18	南区南D-1	丸瓦	(112) × (83)	× 19	1 / 4	酒井氏時代
19	南区南D-1	軒丸瓦	— × (111)	× (46)	1 / 4	酒井氏時代

注) 単位はcmである。現存値を()で示した。

まとめ

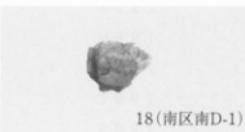
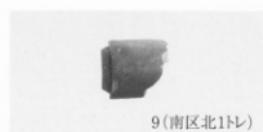
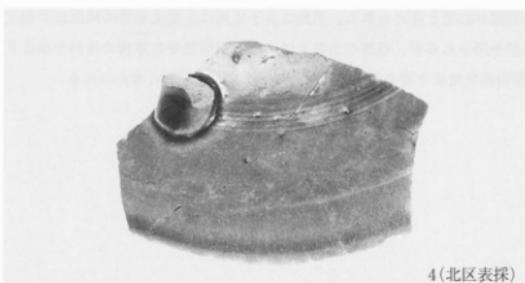
今回の調査は、酒井氏時代の前橋城と再築前橋城の堀跡が想定される区域での発掘調査であった。調査区域は狭く、県庁の増改築に伴い攪乱されている箇所も多く存在した。また、地盤の軟弱な地点も認められたため、掘削に制限があり、明確な遺構を検出することはできなかった。よって、遺構については、本調査区域を酒井氏時代末期の前橋城絵図と再築前橋城絵図を重ね合わせ検証を行った。

北区では、再築前橋城本丸の西を南北に走る堀跡の一部（1号掘）、南区では、酒井氏時代末期の前橋城二の丸の堀跡（2号堀）と想定される遺構が検出され、当時の城郭の様子を知る手がかりとなった。また、瓦や陶磁器の遺物も検出されたが、堀跡ということで掘を埋めるのにコンクリート等の部材も多く廃棄されており、焼土化していたりしたため、遺物の残存状況は良好ではなかった。

今後、本調査区の南北で都市計画道路前橋公園通線の整備に伴い道路改良工事が計画されているため、本工事実施前には、試掘調査及び本調査の実施が必要と考えられる。道路改良予定地は、建造物等の増改築が幾度か行われ、明確な遺構の検出には困難が予想されるが、堀跡や土塁をはじめ武家屋敷等の遺構の検出が期待されるため、これまでの前橋城に関わる発掘調査結果を踏まえながら、更なる成果が上がると考えられる。

<参考引用文献>

前橋市史編纂委員会	『前橋市史』第一巻	1971
前橋市史編纂委員会	『前橋市史』第三巻	1975
前橋市史編纂委員会	『前橋市史』第四巻	1978
前橋地方・家庭裁判所遺跡調査会	『前橋城三ノ丸遺跡』	1996
前橋市教育委員会	『関東の華・前橋城』	1996
群馬県教育委員会	『前橋城遺跡Ⅰ』	1997
群馬県教育委員会	『前橋城遺跡Ⅱ』	1999



抄 錄

フリガナ	マエバシジョウ
書名	前橋城
副書名	都市計画道路前橋公園通線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
編集者名	高橋 亨 小嶋 尚
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10番地2
発行年月日	西暦2005年3月24日

フリガナ 収蔵遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位 置		調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
マエバシジョウ 前橋城	マエバシジョウキヤマツマサ 前橋市大手町 1051番地ほか	10201	16H38	36°23' 22"	139°03' 55"	20041108 20041210	1500m ²	都市計画道路 工事

所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前橋城	城郭	近世	堀跡 2条	瓦類 陶磁器類	なし

調査依頼者 前橋市長 高木 政夫

調査主体者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

調査担当者 高橋 亨 小嶋 尚

調査参加者 青木昭二郎 伊藤 修道 植木 正俊 高橋 公代 多田 啓子 長澤 幸枝
中林美智子 奈良 啓子 細野進太郎 堀込とよ江 弥郡 啓吾

前 橋 城 (16H38)

平成17年3月18日 印刷

平成17年3月24日 発行

編集・発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市三俣町二丁目10番地2

印 刷 松本印刷工業株式会社

